

山の気象

シンポジウム特集

まえがき

山の気象は明治時代には高層大気の気象を知る手掛りとして、大正から昭和の始めにかけては航空気象への利用の手段として考えられて来た。終戦と共に大部分の山岳気象官署が閉鎖されたため此の方面の研究は跡を絶ちラジオゾンデの完備と共に高層気象は山岳気象とは縁を切って発達した。近年になって電源開発と洪水予報の必要から山岳には多くの雨量観測所やロケット雨量計等が設置されるようになった。しかしながら今此処に取り上げようとするのはそれではない。やはり近年になっての事であるが、スポーツ登山の勃興に伴い登山人口が激増し遭難者の数も増して来た。そして遭難統計も次第に明らかにされて見ると、その三割以上が気象遭難であることが判り、登山技術における気象の比重も大きいことが判った。そして登山者や登山団体の中で山の気象の問題が真剣に取り上げられるようになった。たとえば日本山岳会と日本山岳会学生部会は別々に技術専門委員会の中に気象部会を持っているし、東京都岳連でも気象専門委員会が計画されている。多くの登山団体は気象係を持つようになった。気象庁山岳部ではこれらの要求に答えるべくその都度指導を行い、その方針を検討する意味で1956年6月9日気象庁80周年を記念して山の気象座談会を開き一般の意見を求めた。その後同様の要求から1957年6月8日始めてシンポジウムを開いて各位の研究を発表し、又座談会も開いて一般の意見をも聞いた。これら二

つの座談会の記録は部の機関誌「溪流」に掲載されている。シンポジウムの結果は各講演者の原稿を集めてここに掲載される事となった。山の気象は産業気象等と同様に応用気象の一部門であって、利用と防災の両面を持っている。何れにしても大部分は気象部外の愛好家によって行われたものであり、それらを指導すべき山岳部としても指導方針がまちまちであり、未だその緒についたばかりであり、学術的には幼稚な初期の段階にあり、大方の御叱正と御協力をお願いする次第である。猶このシンポジウムの出席者は60名であるが、ここにはそれは省略し、講演題目のみを掲げることとする。(大井記)

- 1 冬の中アの天気と雲* (東京女子大山岳部 O B) 大金尚志
 - 2 富士登山の適不適の時期について (富士山測候所) 山本三郎
 - 3 冬富士の突風と測候所の風(富士山測候所)山本三郎
 - 4 春の白馬杓子岳における気象観測結果 (東京理科大学山岳部) 吉川友章
 - 5 夏の南ア全山縦走時の気象と解析* (千葉医大山岳部) 真家雅彦
 - 6 山の遭難と天気図 (気象庁予報課) 奥山 巖
 - 7 観天望気の要点について (気象庁予報課) 久米庸孝
 - 8 冬の鹿島槍に於ける気象利用の経験* (気象庁高層課) 大井正一
- (*印はスライド併用)

冬の中アの天気と雲

551.585.7: 551.506.2(521.3)

大金尚志**

私たちは昨年11月23日から25日にかけて、木曾駒ヶ岳に登った。以下はその時の天候、特に雲についての簡単な報告である。

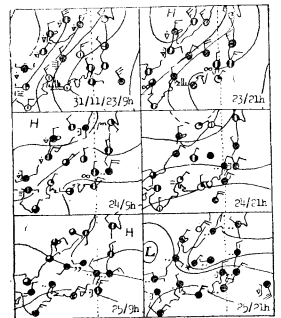
期 日 1956年11月23—25日

コース 伊那市——小黒川発電所——大樽小屋西駒山荘——駒ヶ岳——西駒山荘——伊那市

23日 11月半ばかり、不安定な西高東低から北高型となって崩れる傾向を繰り返していたが、23日に大陸の高気圧が張り出して来て西高東低となった。中央アルプスは大体に於て一日中晴。10時頃から積雲が拡がり、殆んど全天を覆ったが、後消えて、3時頃から雲海が出来始めた。

** 東京女子大 O. B.

24日 大陸高気圧が本州中部から北部を覆って舌状に東にのび、移動性高気圧の様な形となった。中央アルプスは概して天気は好いが、気圧傾度はゆるんで風は弱く、いわゆる西高東低は崩れたので、雲が多い。10時頃から、巻雲、巻層雲、レンズ雲状の波状雲が南西から北東に拡がる。午後になると巻層雲が半天に張



天気図

り出し、その下を高積雲が流れて来る。併し依然として西高東低のベースであるので大して悪化せず、夕方には再び雲が消えて雲海が発生。

25日 大陸高気圧から分離した移動性高気圧が三陸沖に抜けた後に台湾坊主が発生し、日本海にも弱い低気圧が出来た。6時月暈。7時頃から南ア南部に雲がかかり始

め、上空に高層雲が拡がり、それとは別に伊那谷に白色の層雲が拡がって、両方一緒になった形で仙丈以南を覆った。中央アルプスも8時から降雪があったがごく僅かで、下るにつれて小雨となり、12時山麓では薄日がさしていた。

—23日—

時	観測地 (m)	天気	気温	風		雲		現象記録
				向	速	量	形	
6	小黒川ダム (1050)	○	7°C	SW	3	0	Fc	8.00. 甲斐駒, 仙丈の裾にFc. 下界は非常にはつきり見える。
9	見晴台 (1420)	○	4.5°C	NW	4	0	Fc	10.00. 北八ヶ岳・蓼科附近にもFc. 木曾谷からCuがりょう線を越して来るが将棋頭山を離れると消える
12	胸突八町 (2200)	☉	-1.5°C			9	Cu	11.00. 伊那谷の上にCuが発生。 12.00. 木曾側から流れるCuと伊那谷上のCuがつながった感じで全天を覆う。
15	西駒山荘 (2700)	①	-6°C	N	5	7	Cu, Ci Cc	14.00. (稜線に出る)木曾側(W)の空はCi多し。御岳中腹にCu.
18	〃 (〃)	☉	-3.5°C	NE	4	10		14.00. 伊那側, 木曾側共に雲海が出来はじめる 19.00. NEの風強し。

—24日—

時	観測地 (m)	天気	気温	風		雲		現象記録
				向	速	量	形	
6	西駒山荘 (2700)	①	-8°C	NW	3	3	Ci, Cc	
9	〃	○	-3°C	N	4	1	Ci, Ac Cs	9.30. 雲海切れ始め小塊のCu状となる。西南の空にCc的Ciあり, 南からAcの変形したレンズ雲状の波状雲が出てNEに流れる, 太陽に近づくとき彩雲状。
12	〃	○	-2°C			1	Cs, Ac	10.30. 全天にCi. 北ア, 上信越, 御岳, 八ヶ岳, すべて見通しはきくが, 間に低いFcあり。 13.00. 西南よりCsがNEに拡がる 13.30. Cs半天に張り出し, Acが橙色を帯びて流れて来る
15	〃	☉	-6°C			8	Cs, Ar	16.00. 上層の雲が消えて小さいAcのみ夕焼。南アの夕映美し。北アは見えず。木曾, 伊那谷共に雲海。 16.30. 伊那谷から滝雲の様に雲が吹上げて来る。
18	〃	①	-7°C	N	1	2		19.30. 星がよく光る。

—25日—

時	観測地 (m)	天気	気温	風		雲		現象記録
				向	速	量	形	
6	西駒山荘 (2700)	☉	-5°C	SW	6	10	Cs, As	6.00. SWの風強し。月暈あり。併し雲の切れ目には星も見える。南から西にかけては山影なし。南アは赤石以北のピークのみ見えている。 7.00. 南ア南部の上空にAs. それと別に伊那谷に南から白いStが拡がり, 両方が一緒になって仙丈以南は見えなくなった。
9	大樽小屋 (1600)	☉	2.5°C			0	As, St	8.00. 細かい雪が降り出す。降るにつれて雨になった。
12	小黒川ダム (1050)	☉	6°C	W	1	9	As, Ac	11.30. 薄日が洩れ始めた。
14	辰野 (750)	☉		W	1	8	As, Ac	3.00. 風弱くAcの間に青空が見える。